

山口県と日系移民のフィールドスタディ (2) ～ オアフ山口県人会の日系ハワイ人を事例として ～

Field Study on Yamaguchi Prefecture and Japanese American Immigrants (2): A Case Study of Japanese Hawaiians in the Oahu Yamaguchi Kenjinkai

水谷由美子*
MIZUTANI Yumiko

* 山口県立大学名誉教授
Emerita Professor of Yamaguchi Prefectural University

キーワード：移民 日系ハワイ人 周防大島 オアフ山口県人会 フィールドスタディ
Keywords: Immigrants, Japanese Hawaiian, Suo-Oshima, Oahu Yamaguchi Kenjinkai, Field Study

Abstract: This paper presents a field study in which the author conducted interviews with Japanese Americans affiliated with the Honolulu Yamaguchi Kenjinkai in Hawaii about their families' stories. The author participated in the 2021 Aloha Project, a collaboration between Suo-Oshima Town, Suo-Oshima High School, and Yamaguchi Prefectural University, to design a set of Aloha shirts. During the foundational research for this project, the author visited the Japanese Hawaiian Emigration Museum operated by Suo-Oshima Town, developing a strong interest in the relationship between Suo-Oshima and Hawaii, particularly the history and current state of emigration. After retiring and becoming a professor emeritus, the author began researching Japanese immigration in 2023.

The research began in September 2023 with a visit to Los Angeles, home to the Japanese American National Museum, to investigate Nikkei communities across the United States. Interviews were conducted with members of the Nanka Yamaguchi Kenjinkai. In mid-June 2024, the author traveled to Honolulu to interview members of the Honolulu Yamaguchi Kenjinkai about their family stories. At the same time, research was conducted at the Hawaii Japanese Cultural Center to better understand previously documented historical events. With these insights, the author decided to describe the individual family narratives collected through interviews.

The study revealed the existence of historically significant Japanese immigrant communities in areas like Moiliili and McCully, which are comparable to Little Tokyo in Los Angeles. These areas, being older, hold a key place in the history of Japanese immigration as centers of work, education, and daily life for Japanese Americans.

Through interviews about the lives of immigrants and their ancestors, the study provides opportunities to reconstruct the history of immigration, life in Hawaii, and changes in values over time. This has underscored the importance of continuing this research. Additionally, interviews were conducted with residents of Suo-Oshima who have relatives who emigrated. The author plans to further investigate how Suo-Oshima's history of immigration has influenced the awareness and lifestyles of its residents.

要旨：本論は、ハワイのホノルル県人会に属している日系人を主な対象として、家族の物語についてインタビューを行ったフィールドスタディである。筆者は周防大島町と周防大島高校そして山口県立大学の3者が2021年に行ったアロハプロジェクトに参加し、アロハシャツのデザインを行った。このプロジェクトの基礎調査の一環で周防大島町が運営する日本ハワイ移民資料館を訪問し、周防大島とハワイの関係、特に移民の歴史や現状について強い興味を抱いた。そこで引退して名誉教授となった今、ライフワークとして日系移民についての調査を2023年から開始した。

まず、2023年9月に全米日系人博物館があるロサンゼルスに行き、アメリカ全土における日系人について調査することから始めた。そして南加山口県人会の人々を対象にインタビューを行った。今回はその2回目の調査で、2024年6月中旬にホノルルを訪問し、ホノルル山口県人会の人々を対象にそれぞれの家族の物語をインタビューした。同時にハワイ日本文化センターで移民の歴史についての調査をし、すでに明らかとなっている歴史の事象などを理解した。こうした既知の知見を念頭に置きつつ、インタビューから得た個々の家族の物語を記述することにした。

ハワイにはロサンゼルスのリトル東京に匹敵するような日系移民の街、モイリイリ moiliili やマッカリー McCully という地区の存在が浮かび上がってきた。もっともこちらの方は歴史的には古く、初期の移民の歴史に重要な場所である。日系人の仕事、教育そして生活の場であった。

先祖や本人自身のことについてのインタビューを通じて、移民の歴史やハワイの暮らし、人々の価値観やその変遷などについて再構築することが可能ではないかと考え、今後さらに継続して調査研究をする価値が高まった。また、今回は移民をした親戚を持つ周防大島の住人からのインタビューも行った。周防大島における移民の歴史が、どのように周防大島の人々の意識や生活に影響を与えているのかについても調査を継続したいと考える。

1 はじめに

本論は、「山口県と日系移民のフィールドスタディ（1）～南加山口県人会における日系三世を事例として～^(註1)」の続編である。研究動機については、前編ですでに述べているが、ここでも簡単に述べておく。日系移民に興味を持ったのは、周防大島と以下のような縁ができたからである。筆者は、主に、周防大島町、周防大島高校、そして山口県立大学の3者で2021年に実施したアロハプロジェクトでアロハシャツのデザインを主導することになり、周防大島町とハワイの歴史に興味を抱いた。そのためにアロハシャツが誕生したハワイの歴史と文化さらにハワイのカウアイ島と公式交流を60年も実施している周防大島とハワイとの関係について調査することになった。

このフィールドリサーチのために訪問した日本ハワイ移民資料館（周防大島町）の建物はアメリカへ移民し貿易で財を成して帰国した福本長右衛門の私邸が改装されて活用されているものである。福本長右衛門は1881年に屋代村に生まれ、16歳で単身アメリカに渡った。1924年に帰国し、周防大島に戻り、1928年（昭和3年）に私邸を建設した^(註2)。

旧福本邸の2階にはピアノがあり、台所には洋食器などが飾られていた。和洋折衷建築で規模的には豪邸とも言えるものである。昭和3年にはまだ島と本土をつなぐ周防大橋はかかっておらず、本土とは船の行き来をする状態であり、周防大島はある種の離島であった。日本の地方の暮らしが決して豊かで

はない時代に、帰国移民あるいはハワイに暮らす移民がどのような文化を故郷にもたらしたのかという点にも興味を抱いた。

筆者はすでに引退した身であるが、ライフワークとして日系移民の歴史や家族の物語について、インタビューを通じて明らかにするプロジェクトを立ち上げた。2023年9月に最初のインタビューを行った。まず、アメリカへの移民の全容を知るために、ロサンゼルスにある全米日系人博物館を訪問した。ここで南加山口県人会に所属する3名のインタビューと会い、ともに見学した後でインタビューを行った。

彼らの祖先がハワイから大陸に来たものや、直接日本から大陸に来たもの、また日系ペルー人の祖先がいて自分が日系アメリカ人一世というものもいた。日系人と言っても人々の人生は多様である。3名のインタビューの祖先の出身はAは周防大島、BとCは岩国市であった。Aの父親はカウアイ島からアメリカ本土西海岸に移住してきた。

筆者は、アロハシャツのデザインをするために、ハワイの日系移民がその誕生に大に関わったことや、現在、周防大島ではアロハシャツが夏の風物詩となっている現状の背景を理解する必要があった。ホノルルで誕生したアロハシャツの歴史の詳細や現状について、現在進行形で調査研究を進めているところである。今回のハワイ訪問時に、ホノルル美術館でアロハシャツの展覧会‘Fashioning Aloha’が行われていた。2回ほど訪問し資料収集も行った。アロハシャツの研究はまた別のところで発表したい

と考えている。

さて、日系アメリカ人の歴史はやはり日系ハワイ人から始まる。周防大島の人々もまずハワイへの官約移民制度で移民を開始した。そこで、2回目の今回はホノルル山口県人会所属の日系ハワイ人へのインタビューの計画を立てた。今回はハワイとの関係が深くまた長い柳居俊学山口県議会議長に相談をし、山口県国際交流課がホノルル山口県人会に交渉し、現地の受け入れ人と連絡を取ることが叶った。ホノルル山口県人会の受け入れ者であるDとまずは電子メールで、そしてSMS (LINE) で繋がりが、渡航前から事前の打ち合わせができた。何度もLINEのテキストとLINE電話でのやり取りもできた。余談ではあるが、このようなエコノミーで簡易なメディアができたために、コミュニケーションが取りやすくなったことは、国際的なフィールドスタディの大いなる助けとなっている。

今回のインタビューのアレンジはホノルル山口県人会会長のゲール・マサミ・ワカタケが動いて、受入者D、案内役F、そしてインタビュー3名(G、H、I)を選んだ。周防大島出身者を中心にインタビューをお願いしていた。

本論では、それらのインタビューをした内容を記述する。次に、ハワイ日本文化センターでドセントをしているFの解説からハワイの移民の歴史で重要な部分と、F自身の祖先の移民の歴史と家系図を記述する。

最後にロサンゼルス在住のAの従兄弟A+1を周防大島に訪問してインタビューをしたので、それを追加して記述する。また、帰国後にハワイのDからLINEがあり、岩国を訪問してきたJにインタビューをしたらどうかと提案があり、その内容にも触れる。さらに、今回は特にインタビューはできなかったが県人会の理事をしているKについても言及する。

最後になったが、すでに記しているようにインタビューの氏名は、個人情報保護の関係でアルファベットにて示す。ただし、本稿はシリーズで継続して執筆しているものであり、「山口県と日系移民のフィールドスタディ (1)」からの連続方式で記す。移民の日本在住の関係者の場合には+1などで記すことにする。

最後に、今回のインタビューは日本語と英語混じりで行われた。日本語をほとんど話さないFと車中で会った時に、Dが英語で話しましょうと提案したために、全体を通じて筆者は英語にてインタビューをすることになった。筆者が聞き取れなかった部分やハワイ日本文化センターでのFの解説については、Dに助けられた。

2 ホノルル山口県人会の人々へのインタビュー

(1) Gさんの場合

彼女の氏名は記さないが、正式な氏名についてはアメリカの名前、日本の名前、父親の苗字そして夫の苗字で構成されている。

インタビューは2020年6月11日 午前10時から午後0時まで本人の指定により第100歩兵大隊退役軍人教育センター 100th Infantry Battalion Veterans Education Center の会議室で行われた。この施設は、退役軍人1人ずつの寄付によって建設および運営されている。父親が上記の退役軍人だったために、Gはこの施設運営に関わっている。

彼女は1952年生まれの72歳であった。後に記す6月15日にハワイ日本文化センターで行われた日本の全国県人会の会合にて表彰されたことから、山口県人会及び全国の組織に対して貢献している方である。

インタビューで話されたGの家族の物語について記す。彼女の母親(1922年生まれ)側の祖父は周防大島の和田の出身である。1915年頃にまず祖父、その弟そして祖父の父親の3人でハワイに来了。1915年は呼び寄せ移民時代なので、恐らく近親者が先に移民していたと思われるが、Gからは聞き取ることはできなかった。祖父母は日本で知り合って、ハワイに来てから結婚した(写真1)。2、3年で帰国する計画だったが、経済的理由から叶わなかつ



1 Gの祖父母の結婚写真

た。

祖父はハワイに来て、ハワイ島のワイアルア Waialua のサトウキビ農園で働いた。

その後、皆でホノルルに移住し、モイリイリ moiliili（現在のハワイ大学マノア校の校舎前あたり）で花屋を営む。この花屋は祖父の弟が継承し、現在はその孫が今も花屋をしている。

思い出として語られたことに、1962年にハワイから200人が日本中を旅し、皇居にも訪問した。Gは現在、夫婦で日本全国の旅行を楽しんでいる。

話を戻すと、Gの父親（1918年生まれ、広島出身）は、車の修理で身を立てた。その後、パールハーバーで政府の仕事を得た。第二次世界大戦では、第100歩兵大隊に参加したが、思い出を語らなかったので、軍隊時代の詳細についてGにはわからない。

Gの母親（1922年生まれ）は周防大島町和田の出身だった。現在は、知り合いもいないし、家もないために、拠り所はない。しかし、機会を得て何度か周防大島に訪問した経験がある。

Gは小学校の時に、アメリカの学校の放課後に日本語学校に行った。祖母と母親はしっかりした人で、指導が厳しく日本語学校に行くようにGを指導した。彼女はのおかげで日本語を少し話した。

Gは大学では栄養学を専攻し、卒業後は小学校の給食を作る仕事に従事していた。最後まで勤め上げたと言った態度に自信が感じられた。

祖母と母は結婚についても厳しく、日本人以外との結婚はダメだと言っていた。父親はそれほど厳しくなく、誰と結婚してもいいと言っていた。結局、彼女は日系三世の大学教員（英文学専攻）と1978年に結婚し子供2人を授かった。そして現在、孫が12歳、8歳そして2歳の3人いる。

Gが物心ついた時には祖父はなくなっていた。祖母に育てられた。祖父は2、3年働いたら周防大島に帰るつもりだったが、お金はないし、子供ができて日本には帰れなくなった。40年後に1ヶ月ほど周防大島に帰った。母親が生きていたので会いに行った。

非常に苦労したが、年を取ってからはハワイに来てよかったと言っていたらしい。子供はアメリカ人になりアメリカ人の孫もできて、日本には帰りたくない。しかも周防大島の家族は皆、亡くなっている。

ハワイ大学マノア校周辺はモイリイリと呼ばれ、そこには日本人が多く住んでいた。一家でそこに引っ越した。ここには、豆腐屋、魚屋、花屋、風呂屋、宴会場、喫茶店などがあり、賑わっていた。一種の日本人街である。今も地域はあるがかつてのような日本人のビジネスはないと説明を受けた。つまり、街の景観として視覚的には日本人街的な特徴は見られない。最近、鳥居ができた。この鳥居につい

ては3の（1）において説明する。

話を戻すと、モイリイリにはカルチャーセンターやコミュニティセンターがあって、縫い物、日本語学校（毎金曜日）、日本映画上映などがかつては開催された。祖母や母が通っていた。今はウクレレやフラダンスなどの教室がある。ハワイ日本文化センターは日本文化の教育や発信を行っている。

子供の世代には日本の習慣がなくなってきた。孫が日本語を習いたいと言って、一緒に日本語を話したりする。家族間の会話はほとんど英語で、三世の夫とも日本語を少しだけ話す。夫の両親の家系は広島県と新潟県である。

次に、宗教生活について尋ねた。祖父母の宗教は曹洞宗で、遺骨は曹洞宗寺院の墓に入れた。母は本願寺にそしてGも本願寺に入れる予定である。

異人種との関係について尋ねた。すると、彼女が言うにはハワイ人、フィリピン人と日本人は仲がよかった。現地では、ハワイ語や日本語がお互いにわかり、英語をベースに、日本語やハワイ語を入れて話す。戦争の時に、日本語を話すことは禁止されていたが、Gの子供時代には自由だった。

中国人は日本人よりも早くハワイに来ていて、ハワイ人と多く結婚した。日本の元年者はハワイ人と結婚した。1900年にアメリカ合衆国の属州になり、1959年にハワイ州になった。ここでこの話は終わった。

筆者が調べた結婚の制度について、アメリカ合衆国では、1967年まで約300年間、異人種間結婚禁止法が施行されていた。それ故に、ハワイの日系人は1900年以降1967年までは、二世および一部の三世までは日本人あるいは日系アメリカ人と結婚する以外の方法はなかったのである。

Gの子供の結婚について聞いた。息子は日本人とイギリス人のダブルの女性と結婚した。彼女は、移民でアメリカ人的な性格だ。娘はベトナム人と結婚した。Gは孫の結婚について、いい人なら誰とでも結婚していいと考えている。

次に日本と関連がある生活について質問した。まず、食生活についてである。家庭では日本食が中心で、ご飯、漬物、魚、味噌汁などだった。日本食は日本を感じる時だ。お料理は祖母から習った。

そのほかには、日本を感じる時は盆踊りで、法被を着る。家の中ではアメリカ的な暮らしをしている。しかし、正月は門松を飾り、善哉などで餅を食べる。ハワイ人は概して餅が好きだと言う。

その他の日本的な行事として、軍人の日 Memorial Day（5月29日）には精霊流しが大々的に行われる。その時に、アラモアナパークなどの海に精霊を流す。この行事にはハワイの誰でもが参加できる。

ホノルル山口県人会について尋ねた。1925年（大正14年）8月16日にハワイで大島郡人会の発会式

(写真2)があった。その後、1967年(昭和42年)にホノルル山口県人会が発足した。他の県の例として、沖縄県人会は今でも規模が大きい。9月にはフェスティバルがある。

第二次世界大戦中の話を聞いた。父親のように第100歩兵大隊に入ったのは日系人のみだった。父親はヨーロッパには、自発的に行った。しかしながら参戦した結果、耳が聞こえなくなった。幸いに補償金が出た。第100歩兵大隊の歴史は、パールハーバーのアリゾナ美術館で見ることができる。

衣生活について聞いた。まず、アロハシャツの話聞いた。ダウンタウンの中にチャイナタウンがあり、ムサシヤ商店はここに店を構えていた。現在はなくなっている。アロハシャツはどこで着ても大丈夫である。そのスタイルでは、スーツやネクタイを着用しない。女性はムームーを着用する。ムームーは1950年代から1960年代に流行していた。ホロクやホロムーはフラでは着ることがある。いずれも昔のスタイルである。着物については、子供時代に祖母が着せてくれた。

インタビューの後、Gは第100歩兵大隊退役軍人教育センターを案内した。そしてDとFと筆者はそこでGと別れた。

(2) Hさんの場合

Hのインタビューは、Dの自宅において、2024

年6月14日午前10時から約2時間行われた。この時にHは妻と一緒にD宅に来た。

Hは1942年7月11日生まれの81歳で、四世である。Hは米国学校吹奏楽指導者協会に属し、クラリネット奏者であり教育者だった。上記協会の会長を1995-1996年に務めた。Zama Band Groupに16ヶ月所属もしていた。夫婦に子供はいないが、教え子たちとの交流が今もあり、彼らが子供のようだと言っていた。

以下がHの家族の物語である。曾祖父は大島郡の小さな島に生まれ育った。彼は1885年の官約移民制度開始の年に、最初に移民した。ハワイへの移民をして、カウアイ島のサトウキビ農園で働いた。Hの祖父は1880年に周防大島で生まれた日系二世である。カウアイ島で7年間家族と暮らし、その後オアフ島に移住して、警備員になった。そして、1958年にホノルルで死亡した。

祖母は1890年にカウアイ島で生まれた。兄弟はホノルルに移り、船員をしていた。その後カリフォルニアに移住した。第一次世界大戦では、アメリカ軍に参加して、ヨーロッパへ行った。そして戦後はまた船員に戻った。第二次世界大戦に参加しようとしたが、強制収容所いわゆるキャンプに行かされた。トラブルがあり2、3ヶ所のキャンプを渡り、最終的にはマンザナのキャンプで落ちついた。戦後、日本に行ったが、日本ではアメリカ人、アメリカでは



2 大島郡人会発会式記念写真 1925年(大正14年)8月16日

日本人とみなされた。最後には山口県で暮らした。

父は1916年にホノルルで生まれ、Hがちょうど10歳の1953年にやはりホノルルで亡くなった。若くして亡くなった原因は、テレビアンテナを付ける会社に勤めていて、2階の屋根から落ちてしまったからである。

1993年に父の従兄弟が周防大島に行った。

祖父と父はAala近くのPalamaに暮らしていた。彼らはTokioと呼ばれたマッキンリー高等学校に通っていたが、お金がないので歩いて通ったという。地図でおおよその地点を設定して直線距離で7km以上はある距離であった。高校生とは言え、大変な道のりを通ったことになる。

Hは強制的に軍隊へ2年間入った。その後、中学校、高等学校の音楽の先生になった。その時の生徒に小錦がいた。小錦はサクソフォンを吹いていた。そして1982年に相撲のデビューをした。

曾祖父が官約移民制度の最初の移民だったことから、Hは調査をし、資料を持参して、以下のように官約移民制度について話をした。その内容は以下のようなものである。1885年に官約移民のために、横浜から3隻の船が出た。2月9日にはCity of Tokioが、男女併せて959人を乗せて出航した。そして6月17日・7月6日にYamashiro Maruが男性938人、女性35人そして子供14人の合計987人を乗船させて出港した。紹介された資料は'Eileen H. Tamura, In Defense of Justice: Joseph Kurihara and the Japanese American Struggle for Equality, University of Illinois, 2013.'である。

Hは山口県人会に入ってからルーツに興味を持つようになって調べている。

父側の祖母の弟はカウアイ島Kauaiで生まれた二世である。母は広島県の出身である。父は四世、母は三世である。兄弟は2回、周防大島に行ったことがある。

筆者はここで驚いた。Hは80代であるが、すでに五世/四世である。ハワイへの移民の歴史の長さがここで理解できる。

話を戻すと、Hは約9年前にホノルル山口県人会に入り、現在、山口県人会のえひめ丸慰霊碑^(註3)の掃除をする責任者をしている。えひめ丸は愛媛県宇和島水産校の実習船で、急浮上した米原潜「グリーンビル」に衝突され沈没し、9名が犠牲となった。慰霊碑は2002年にカカアコ臨海公園に建立されたものだ。日本の各県人会等が分担して清掃活動しており、Hがリーダーとなって、ホノルル山口県人会は年に3回、清掃活動を行っている。

Hは弟とは仲良くしているが、弟はトラブルメーカーであった。

両親は日本語を勉強するように言ったが、普通の

学校を終えた後に行かなければならないのでやめた。日本に軍隊で行ったがその時には日本語を学ぶのには遅すぎた。

宗教について尋ねた。家族はクリスチャンだったが、本人は教会に行っていない。ハワイはプロテスタントが多い。なぜなら、リリウオカラニ女王(1838-1917年、ハワイ王国第8代国王：在位1891-1893年)がプロテスタントになったからである。80代の人は無宗教が多い。

妻は中国人で、Hが32歳の時に結婚した。母親は中国人でも問題はないと結婚を喜んだ。子供はいないが、卒業生と親しくしていて、問題はない。

日本は好きでよく旅行をしている。妻は日本語が好きだし、日本旅行を気に入っているが、中国には行きたがらない。

以上が聞き取った内容である。Dは夏だからと言って、冷たいおでんを手作りしてH夫妻、Fそして筆者に振る舞った。

(3) Iさんの場合

Iへのインタビューは、同様にD宅でHたちとのランチの後で行われた。

Iは1937年4月11日生まれで、日系三世である。一緒に来た妻は1938年7月7日生まれで、二世/三世である。

Iの家族の物語は以下のようなものである。

祖父と祖母は岩国出身である。Iの妻は沖縄出身である。

Iの祖父母の移民の理由は、岩国で農業をしていたが経済的に苦しく、ハワイで大きなお金を稼ぎたかったからである。2人は日本で結婚した。

Iの父親側の祖父はワイナイのプランテーションで働いていたが、祖父と祖母の両方が早く亡くなってしまった。父親も同様にワイナイオアフのプランテーションで働いていた。そこでは、メカニックやミルの仕事をずっとしていた

母親側の祖父はハワイ島のハーウィHawiで水流管理の仕事をしていた。山の反対側から水をひくシステムの管理である。その時に、日本に住んでいた父親が帰るようになって来たので帰国した。母親はハワイで生まれた。父の姉妹は日本に帰り、お見合いで結婚して農家を継いだ。

父は第二次世界大戦で志願したが、子供が多かったので断られた。5人兄弟の内、Iは真ん中だった。1941年の4歳の時に、おじ2名がアメリカ本土のキャンプに行った。年下のおじはサンディアゴのキャンプに入っていた。忠誠心アンケートLoyalty Predge (Questions)^(註4)にサインをしたのでキャンプを出ることができた。そしてロサンゼルスでクリーニング店を経営した。子供ができたので戦争に

は行かなかった。

年上のおじは忠誠心アンケートにサインをしなかったため、カリフォルニアのTule Lakeキャンプに入っていた。戦後は家族全員で日本に帰り岩国で暮らした。スラングがわかるということで、岩国基地で通訳として働いた。そのおじの妻の家族は市長・市議会などの政治家をよく知っていたので、おじが岩国に行った時に、基地の人がIはアメリカ人か日本人かと疑問を持ったという。

若いおじは戦争中のことを話さず、経験を自分だけに飲み込んでポジティブに生きて行こうと決めた。戦争での体験については、恥とか仕方がないと考え、皆が話さなかった。

話を戻すと当時ロサンゼルスのおじの周辺では、白人や他の人種の誰もが日本人を敵とは思っていなかった。また、彼のクリーニングの仕事は他の人がしたくない仕事だった。妻の家族がプロテスタント教会に属していて、そのメンバーが戦時中の敵国の日系人という立場の彼らについてサポートしたために、彼はクリーニングの仕事が可能だった。

筆者はここで新しい知見を持った。忠誠心アンケートの存在、戦争に行く以外にキャンプから出て、商売ができた人がいたこと、日本人の仕事をサポートしたアメリカ人の存在などである。

話を戻す。Iの母親は彼が育った時は貧しかったが、教育熱心だったので、Iは大学を卒業できた。卒業後、空軍に入り空から巡査する仕事をした。そして後に土木技師Civil Engineerになった。岩国基地で1989年-1999年まで働いた。若いおじも働いていたので、彼を助けた。

住居は大竹市久波で岩国基地まで自転車で通っていた。花粉症になりハワイに戻った。大竹の住居の山上の方に三井の大竹宴会場があった。大竹に住んだ理由は政府がアレンジしたためである。

その間、子育ては妻の姉妹が面倒を見ていた。男の子と女の子がいた。大人になって女の子はハワイアンバンクに勤めていた。

Iの妻は沖縄出身で、父側は二世で母側は三世になる。1900年から沖縄からの移民が始まった。

毅然とした妻にサポートされながら、Iはインタビューを終えて帰って行った。

(4) Dさんについて

Dは日本人でいわゆる日系移民ではない。いわゆる新日系アメリカ人一世だ。彼女は1943年に光市で誕生し、18歳までそこで育った。現在は82歳である。現在、54歳の長女と52歳の長男がいる。

東京の看護学校に進学し就職したが、叔母の勧めで両親の近くで暮らすために転居し、広島で再就職した。白人のアメリカ人の夫(1936年生まれ)は

広島にあった原爆障害調査委員会(現在は放射線影響研究所 Radiation Effectsいわゆる放影研)に勤めていた。彼は病理学 Research Foundationの医師の研修生をしていた。Dはその放影研で看護師をしていた。そこで2人は出会い結婚した。

そして1971-72年に夫の仕事の関係で、ハワイに移住した。その後、1972-2019年に夫の仕事の関係によりカンザスシティで暮らした。2人はリタイアしたら長女が住んでいるハワイに移住しようと計画をしていたが、リタイアする前に夫が亡くなった。そのため、Dは2019年にカンザスシティ(ミズーリ州)を引き払い、1人でハワイに移住した。Dの子供は新日系アメリカ人(ハワイ人)二世と言える。

Dの娘夫妻は実の子供がいなかったために、韓国人の2人の子供を養子に迎えている。韓国に行き、法廷で許可を得た。アジア系であることから、比較的許可が得られやすかった。それぞれ1歳過ぎに迎えた。上の子は12歳、下の子は5歳。親はそれぞれ別々である。子供を養子にした親とは交流をしている。

娘の夫は白人のアメリカ人でハワイ大学の経済学の教授だ。娘は公務員で海洋関係の経済学者である。Dの息子は病理学、特に神経小児科やてんかんなどを専門にしており、テネシー州グレイスランドで暮らしている。息子の妻はアメリカ人(白人)でその祖父の叔母の夫が同志社大学で英語を教えていた。

現在、Dは長女の家で一人暮らしをしている。医療サービスがある高級な老人ホームに2025年3月に入所予定である。ここでは本格的な芸術鑑賞の機会や数多くのアクティビティが準備されている。入所を楽しみにしているようだ。

ホノルル山口県人会には、日本語ができるということで、移住後すぐに県人会の幹部になり、活躍をしている。

(5) Eさん他ハワイ連合日系協会の会合におけるインタビュー

Dがその他のインタビューの機会を作るために、ハワイ連合日系協会就任式および表彰の祝賀会 United Japanese Society of Hawaii 66th Installation & Recognition Banquet June 15 2024に筆者を招待した。この会は2024年6月15日午前10時から午後1時過ぎまで開催された。前半は新しい役員の就任式と表彰式があり、前述のGがそこで表彰された。後半はランチを含む交流会であった。

筆者はホノルル山口県人会のテーブルに席があった。ここに参加していた人の先祖の出身は、周防大島町安下庄、岩国市、熊毛郡田布施などであった。以下ではEから聞き取った話を簡単に記しておく。彼女の祖父は岩国に住んでいたが、ビジネスマンで、ロサンゼルスに移住した一世である。そして父はロ

サンゼルスで生まれたが、岩国に祖父とともに戻った。そして後にハワイに行き、軍隊に入った。Eはハワイで生まれ、教育関係の仕事をしている。

隣の席にいたJと話をした。祖父母は周防大島町安下庄出身だった。家族の話は聞き取れなかった。しかし、興味深いことに、彼女は日本通であり、しばしば日本を訪れているという。ちょうど7月には横浜に行き、Kポップのコンサートに行く予定があると saying いた。彼女はホノルル山口県人会の理事の1人で、山口市で2024年11月に山口市が主催したホノルル市議会と山口県人会の歓迎会にも参加していた。筆者はまた同じテーブルで、隣り合わせた。Jはテーブルでの話の中で、日本人になりたい、日本に住みたいなどと言っており、訪問団が帰った後もしばらく日本に残ったらしい。

上記のホノルルでの祝賀会の最後には、法被を着た岩国出身者の日系人グループが主導して、盆踊りを踊った。会場のテーブルを全て囲む大きな円になって、日本全国のハワイにおける県人会の参加者が全員で踊った。

（6）Kさんの場合

Kへのインタビューの機会は、突然に現れた。DからLINEがあり、Kは7月に山口県に行くから話を聞いたらどうかという内容だった。Kは1945年10月6日にハワイで生まれた。現役時代に小学校の先生をしており、最後は校長になった。その頃から、岩国の小学校とハワイの小学校のコミュニケーションの橋渡しをしていた。引退後ではあるが今回も岩国市内の小学校とハワイの小学校と縁結びをしたいという申し出をするために小学校を訪問した。

筆者はその小学校までKを迎えに行き、岩国国際ホテルでランチをしながら、インタビューをした。彼女は、今回、案内役を務めたFと、幼稚園時代からずっと同級生で、後で調べると誕生月も同じで6日違いの誕生日だ。大学もハワイ大学教育学部で同じであった。

インタビューした内容は以下のようなようだ。Kの夫の父はペルーのイカIcaで生まれ、後にリマに移った。義理の父はペルーで大きな店をいくつか経営していた。そしてペルーからアメリカに移住して、幾つかの大きなコミュニティのリーダーをしていた。そして、第二次世界大戦中に、テキサスのキャンプに入った。その時に家族をペルーから呼んで、1年半をキャンプで暮らした。

戦後は夫の父はニュージャージーで野菜のパッケージをする工場に働いた。後にシカゴに移った。そこでアパートを買い、不動産業をはじめた。それは夫が5歳の時だった。夫は5人兄弟だった。

1972年に夫はハワイに移った。なぜなら、以下

のような出会いがあったからである。夫の母側の祖父母を福岡で見舞うために、日本に行く途中でハワイに寄った。バーで飲んでいたら、ある男性と出会った。その時に仕事の話をし、一緒に会社をやろうという話になった。またハワイで日本人はマジョリティで過ごしやすかったと考えたことも移住の後押しをした。

さて、K自身の父親（1916年生まれ）は現在の山口県周南市富田出身で日系二世だった。ハワイへは1918年、2歳の時に移住した。祖父母はハワイと日本を往復した。ハワイではサトウキビ畑で働いた。Kの母親はカウアイ島出身だった。

母方の曾祖父は岩国の新湊出身で、1900年にハワイへ移住した。1898年に祖母が生まれる。従って、Kは父方の三世で母方の四世になる。

祖母は日本語を話した。祖父母は魚屋を経営し、母は高校卒業後に仕事を助けた。父は自動車のパーツのセールスマンだったが、39歳の若さで亡くなった。父母同士は日本語で話した。しかし、家族は英語で話した。Kは小学校時代、2年生から6年生までの5年間、日本語の読み書きを学び、ハワイ大学でも日本語を勉強した。小学校の先生になり、子供を日本に送り込む必要が出てきて、日本語を再度、勉強し始めた。

母の祖父母はクリスチャンだった。日曜日や祝日ごとに祖父母と食事をして、日本料理を食べていた。母の一番下の弟は強いクリスチャンで、ベビーシッターの女性が日本語を話すのがうまかったので、日本語がわかった。

時間切れとなり、以上がインタビューの内容である。Kは娘と孫と一緒に岩国を訪問していた。岩国には何度も来ている。インタビューの次の日に娘と孫は大阪に行き、Kは1人でルーツを探るために、周南市富田の役所を訪問すると言っていた。

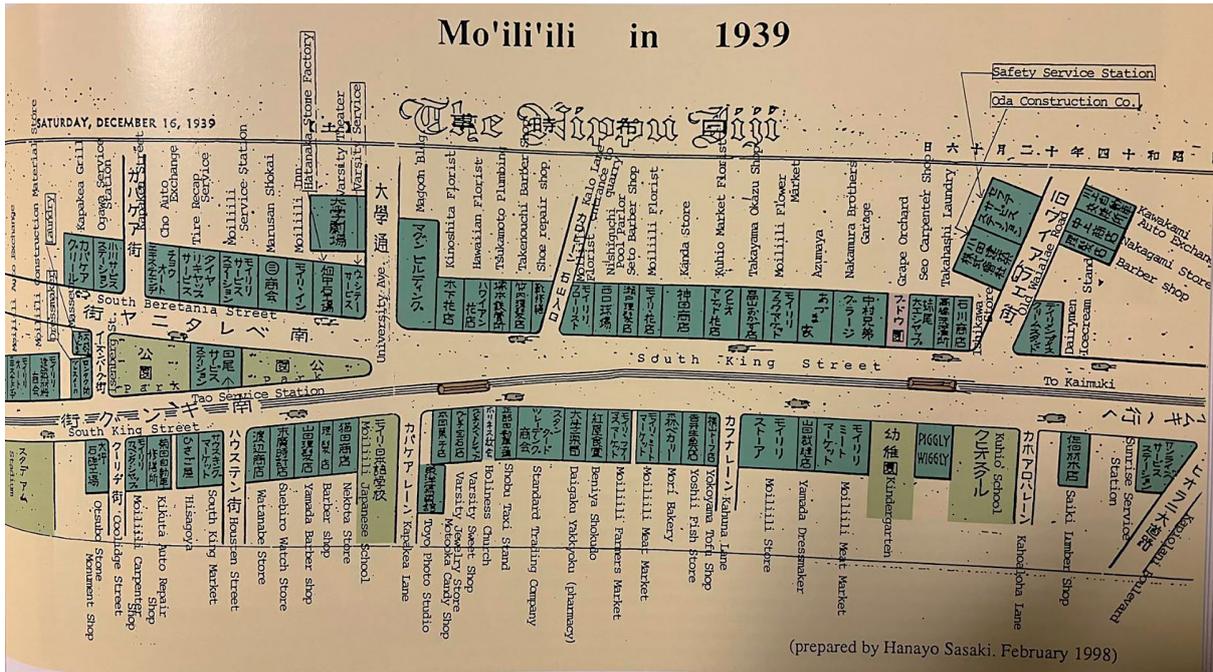
3 ハワイ日本文化センターとドセントFの物語

（1）ハワイ日本文化センター訪問

ハワイ日本文化センター Japanese Cultural Cen-



3 ハワイ日本文化センター



4 1939年におけるモイリイリの古地図

ter of Hawaii (以後は略表記のJCCHと記す)は、かつての日本人街とも言えるモイリイリにある。1939年のモイリイリの中心街を表す古地図(写真4)を見ると、タイヤリキヤップサービスとモイリイリサービスステーションあたりにある。この地図にあるように、あらゆる種類の商店街、日本語学校、劇場、球場、工場、レストランなどがあつた。Gの家族がハワイ島から移住し、花屋の商売をした街である。マノアの谷の南側に位置しており、近くにハワイ大学マノア校のキャンパスがあるため、モイリイリの中に大学通がある。

現在は、ロサンゼルスのリトル東京のように店舗が集積して、観光地化している訳ではない。通りを眺めると赤い鳥居が目立つ。キングストリート(地図では南キング街)とベレタニアストリート(地図では南ベレタニア街)が交わる三角地帯の公園内で唯一、日本と関連がある地域だと視覚的に感じられ象徴的なモニュメントである。この鳥居は宮島の厳島神社の鳥居を半分のサイズで作ったレプリカ(写真5)で、2001年に広島商工会議所が寄贈したものである。

JCCHはハワイにおける日本人移民の足跡を伝承・展示している歴史博物館である。1985年に官約移民100周年を記念して、ホノルルの日本人商工会議所の有志によって創設が企画され、1987年に開館された。1991年と1994年に2つのビルが完成し、現在、第2ビルに展示会場「おかげさまで I am what I am, because you」がある。

ここでの主な展示は、元年ものと官約移民の紹介、



5 モイリイリ公園内に設置された厳島神社半分サイズのレプリカ

一世のサトウキビ農場における労働・当時の住居など、移民が日本からハワイに持ち込んだ日用品・台所用品・衣服・神棚・仏壇(写真6)など、写真花嫁、農場での賃金改善を求めるストライキの様子、日系商店や街の風景の再現、第二次世界大戦中の第442連隊戦闘団・第100歩兵大隊・陸軍情報部などに関



6 JCCH展示会場 生活用具のコーナー

する画像や映像、日本の祭りや祝いのための造形物などで構成されている。

今回、筆者の案内役であり運転手をしたFは、すでに述べたように上記センターのボランティアの解説者、ドセントをしている。軍隊を退職してから、ルーツへの興味が生まれ調査研究をした。そしてこのJCCHでの訓練を受けてドセントに採用された。

6月13日午前10時に宿泊していたホテルでDと待ち合わせ、玄関に車で来ていたKと落ち合った。3人でハワイ日本文化センターに向かった。

JCCHに入ると、右手に受付があり、その奥にはショップがあった。左手には多くの販売用の着物が展示されていた。展示会場の入り口には、12本の石柱（写真7）が立っており、ここに日系移民の精神の源となる言葉が刻み込まれている。入り口側の右から刻まれている文字を記す。「犠牲」「義理」「名誉」「恥、誇り」「責任」「忠義」「感謝」「仕方がない」「頑張り」「我慢」「恩」「孝行」。

ドセントの解説が始まる。たとえば「感謝」については、日系一世のお陰で今がある、こうした縁とか感謝また先祖への尊敬という気持ちが強かった。民族によって価値観が異なる。日系三世くらいまでは日本の伝統的な先祖を尊敬するや我慢するなどの



7 「お陰様で」入口の石柱

精神を保持してきた。四世以下はそれほどではなく、容易に苦情などを訴えるようになった。

さて、1868年に元年ものと言われている人々が横浜から出港するのの際して、徳川幕府は許認していたが、明治政府は渡航を認めていなかった。

渡航したほとんどの人が農業経験がなかった。サトウキビ畑での労働は過酷だったが、月給は4ドルだった。そこで移民はハワイでの労働条件などについて、明治政府に助けを求めた。明治政府はハワイ政府と労働者の待遇面の話し合いをした結果、日系移民は日給が上がり、また日本に帰る許可が得られるようになった。3年の労働契約を終えて、元年ものの3分の1はハワイに残り、3分の1は日本に帰り、3分の1はアメリカ大陸に行った。残念なことになったものもいた。

その後10年以上が経った1881年にカラカウア王（写真8）が世界一周旅行に出航し、その途中で日本に寄り、明治天皇に謁見した。ハワイでは海外からもたらされた菌によって、ハワイアン的人口が減少していた。そのため、サトウキビビジネスが隆盛しつつある中で、労働力不足に陥っていた。1852年に中国人がハワイに入り、次にポルトガル人がきた。しかし、彼らは労働力として十分ではなかった。そこで、カラカウア王は、人材を派遣してもらうように天皇に頼んだのだ。

それを受けて明治政府は1885年から実施する官約移民制度を設けた。元年ものが移民してから17年後に次の移民が再開された。明治維新の活躍により、薩摩と長州出身の多くの人々が政府の役人になっていた。彼らが郷里の人々をハワイに送った。筆者は山口から多くの移民がハワイに渡った背景を再び認識することになった。



8 1881年カラカウア王（前列中央）日本訪問記念

サトウキビ畑では国別のキャンプに住まわせられ、競争心を煽らされた。各国のキャンプでは言葉が通じる人だけの中で暮らせた。外から情報を得る暇がないので、故郷の親から伝わったことを伝え続けた。それ故にハワイで知っていることは日本のことだけという状況だった。またそこでは出身地域の人が集まり、祭りや歌などの楽しみが共有された。

官約移民時代には29,000～30,000名の移住があった。平均月給は、男子は15ドル、女子は10ドルだった。

この制度が終わり、1894年から私的移民時代が始まる。ここでは約57,000名が移住した。この時の平均月給は男子が12.5ドル、女子が10ドルだった。移民事業が政府から民間に移行し、業者がいろいろな名目で金を搾取したために、多くの労働者は契約期間の3年間は借金に追われた。

そして、1900年から自由移民の時代がはじまる。この時、約71,000名が移民した。平均月給は男子が15-18ドルだった。1900年にハワイはアメリカ合衆国の属領となった。その結果、米国の法律で契約労働者の移住が禁止されたために、ハワイにすでにいたものも含めて自由な雇用が行われた。また、ハワイにいたものは、労働条件が良い米国本土へ流出した。

1908年から呼び寄せ移民時代がはじまる。この時代には約61,000名が移住した。平均月給は男子で20ドルだった。米国西海岸にあふれた低賃金労働者に対する反感が募り、米国と日本の間に紳士協定が結ばれた。日本政府は移住者の子女と元移住者のみに出国許可を与えた。それ故に、すでに移民していた男子は結婚する相手を見つけることが難しく、20,000名以上のピクチャー・ブライド（写真見合いによる花嫁）が結婚のためにハワイに移住した。

1924年からは移民禁止時代がはじまる。米国議会がアジア系移民を禁止したためである。この頃までに218,000人の日本人がハワイに移住しており、多くの者が帰国、死亡、あるいは米国本土に移住したが、二世の誕生によりハワイの日本人（日系人を含む）は116,615人へと増加し、全人口の42%を占めていた。

その後は、1941年から第二次世界大戦の時代となり、主に日系二世がアメリカ軍に入った。彼らは第100大隊・第442部隊で戦果を上げ、評価を受けた。退役軍人には報奨金が与えられ、それで多くの日系二世が大学へ行き高学歴となった。彼らはさまざまな職種で活躍し、立身出世した。

JCCHにおける戦後コーナーの最後の展示はエリソン・オニヅカに関するものであった。オニヅカは日系人として初めて宇宙飛行士に選ばれながらも、1986年のチャレンジャー号爆発事故で殉職した。

著者はロサンゼルス滞在中に、リトルトウキョウ



9 ジョンの父方祖父弥一郎（後列右）家族写真

の中心街を散策していた時にチャレンジャー号の小さなレプリカがオニヅカの活躍をたたえる記念碑として建てられているのを見た。このような両者の展示は本土アメリカでもハワイでもオニヅカが日系人の優秀性を象徴する存在となっていることを表していると考えられる。

以上がドセントFの案内で得られた大筋のハワイにおける日系人の歴史である。ここでは数字的な部分や詳細について、JCCHの展覧会カタログ『お陰様で^(註5)』を参照して記述した。

(2) ドセント、ジョン・カズオ・オクタニの家族の物語

JCCHで日系人の歴史を説明する時に、Fは自らの家系図や先祖の写真を用いて説明していた。資料もあり、より深く知ることができるのではないかと、インタビューを改めてすることを申し出た。その結果、JCCHを訪ねた次の日、6月14日にD宅でインタビューを待つ間の午前9時半から10時半まで、Fのインタビューを行った。Fは先に述べたように自分の家族の系譜を資料として用いて、日系移民についての歴史の解説をしていた。そこで、今回の記述に関して、氏名を出して良いかという許可を求めたら、大丈夫という返事だったので以下では、家族も含めて氏名を記して、インタビューの内容を記すことにする。

現地ではファーストネームで呼び合うのが習慣なので、Fをジョンと呼んでいた。本名はジョン・カズオ・オクタニ John Kazuo Okutani という。以下では現地で使っていたようにジョンと言う。日本名であるカズオは漢字で和男と綴られる。この名前は平和を祈って名付けられたと誇らしげに説明した。実際、彼は1945年10月生まれで、第二次世界大戦が終わってすぐに生まれた。それ故に平和が重要なテーマだったのである。彼は78歳だが、非常に健

康的かつ活動的だ。車の運転も解説も素晴らしかった。子供は2人いる。現在は、離婚して1人の子供の家族と同居しているが、生活は別々で自由に暮らしている。

ジョンの父系の家系図の源流は、曾祖父の奥谷源次郎（1850-1927年）である。源次郎は由宇の出身だ。その息子の奥谷弥一郎（1882-1923年）が、ハワイに移住した一世である。祖父の弥一郎は日本では会社に勤めていたが、20歳の時（1902年）、つまり自由移民の時代にハワイに来た（写真9）。その時の同行者は妻のチセ Chise、兄弟のキク Kiku（夫リントロウ・トクナガ）、兄弟のウメ Ume とシズ Shizu、さらに従兄弟のソウダチ・オクタニ Sohduchi Okutani（後に Ume と結婚）であった。ソウダチ夫妻は、現在田布施に暮らしている親戚のリョウゾウ Ryozo の祖父母にあたる。2024年の春にジョンは孫を連れて田布施に行き、初めて親戚と対面した。それが再従兄弟のリョウゾウである。

ジョンの父親、エドワード・ゲンイチ・オクタニ Edward Genichi Okutani は1909年にハワイで生まれた日系二世（1976年没）で、母親のキミコ Kimiko（旧姓は Kuwahara）は1916年生まれの日系二世（2018年没）である。102歳という長寿であった。

母方の系譜を見ると、キミコの父、つまりジョンの祖父のキイチ・クワハラ Kiichi Kuwahara（1882-1974年）（写真10）がハワイへ移民した。写真の前面の左が曾祖父ヨシタロウ・クワハラ Yoshitaro Kuwahara で右が後妻のチウ Chiu（旧姓ヒラオカ Hiraoka）である。後列の中央が祖父のキイチで、その左が弟のツネスケ Tsunesuke、そして右が祖父の後妻チウの連子のテルコ Teruko である。キイチの若き日の家族写真である。

祖父のキイチはタマヨ Tamayo（旧姓カネシゲ Kaneshige）と結婚し、男子と女子がそれぞれ3人ずつの6人の子供を授かった。日本にいる間に、男の子が生まれすぐに亡くなる。ハワイに移住してからキミコを含み5人の子供が生まれた。その内次女は生後8ヶ月で亡くなった。その他の兄弟は皆、長寿であった。

さて、ジョンの父親のゲンイチはトクオ Tokuo とヤヨイ Yayoi の3人兄弟であった。彼らは日本とアメリカの2重国籍だった。ただし、1924年に2重国籍は終わった。ゲンイチは日本に帰国していた間、船乗りで船をコントロールする仕事をしていた。妻のキミコも帰国しており、二人は由宇で結婚し、一緒にハワイへ再度渡った。最初はハワイ島ヒロのサトウキビ農場で働いていたが、後にホノルルに移住し看板描き師として働いた。

彼らはホノルルに移住した時に、港の近くのマッカーリー McCully に住んだ。その後、モイリイリに



10 ジョンの母方祖父キイチ（写真中央）家族写真

移り住んだ。多くの移民が同じようなルートを辿った。ジョンはこのマッカーリーの歴史について非常に興味を持っている。マッカーリーは、ホノルル港の近くで、ホノルルに来たばかりの移民がまず過ごした場所だ。日系一世が暮らしたアアラパーク Aala Park や日系二世が暮らしたモイリイリの近くに位置する。マッカーリーには多くの日本人が暮らしてもいた。

ジョンはハワイ大学で教育学を学び、卒業後、空軍に務め将校になった。その後陸軍に入る。長い陸軍の務めの間、韓国に3年、ドイツに5年そして残りはハワイで務めた。

2010年頃に山口県人会に入った。県人会に若い人が入ってくるのが少なくなった。ワカタケ会長が色々な人を連れてくるので活発でもある。今後は四世、五世の混血が進んでおり、難しくなる。

現役時代は忙しかった。2007年62歳で退職してから日本に興味を持つ。特に家族の系譜やルーツに興味を持った。その後、リサーチを重ね、2009年にJCCHのドセント Docent（ミュージアムのガイド、学芸案内人）になる。JCCHでは日本から戸籍を取り寄せることができるので、彼は家系図 Family Tree を作成している。

ジョンの現在の家族と人種について尋ねた。息子の妻は日系で、孫は20歳と18歳の2名である。2023年7月に孫2人を連れて由宇を旅行した。前述したように、2023年7月に再従兄弟のリョウゾウ・オクタニ Ryozo Okutani（72歳）と会い、初めて生きたルーツに触れることができた。

4 南加山口県人会所属のAの周防大島に在住する親戚へのインタビュー

（1）南加山口県人会 A の続編を記す理由

国際的なフィールドスタディは、時間や場所など、

限られた環境でのインタビューになる。それ故に、多角的に日系人の人生を捉えるためにも、主なインタビューと関係のある人物などにもインタビューをすることによって、人物の人生の側面を補完したり、新たな情報を追加して、理解を深めることができる。

拙著「山口県と日系移民のフィールドスタディ(1)～南加山口県人会における日系三世を事例として～^(註1)」に登場したAの父親は元々カウアイ島で働き、後に本土に移住したものであった。筆者の本研究の目的の一つに、周防大島町とハワイの文化交流を通じた周防大島町の地域創生の可能性を探ることがある。周防大島に在住する親戚からのインタビューを通じて、新たな知見を期待した。

(2) Aの従兄弟A+1の場合

まず、以下で家族の物語を記述するに際して、アルファベットでは表記しきれない。また、アルファベットでの表記では移民したあるいは日系のインタビューとの混同が起こる。そこで必要に応じてアイウエオなど氏名に関連するカタカナで愛称をつけて、表記することにする。

A+1は、周防大島町和田で生まれ育ち、長年東京で働き、定年退職をして、生まれ故郷に戻ってきた。1946年6月生まれで、インタビューした2024年9月23日には78歳であった。

A+1の父親はAの父親の兄弟で長男のために一族の直系である。AとA+1は従兄弟同士と言うことになる。以下でインタビューの内容を記述する。

まず幼くして渡航した女性ウの説明からする。ウは1885年、官約移民制度の第1号として4歳の時にハワイに移住した。A+1の曾祖父デの兄弟の三男ヨが渡航歴のあったウと結婚してハワイに渡った。こうした家族の環境から、ハワイへの移民は比較的身近なものだったと考えられる。

そして祖父のセ(明治13年生まれ)は夫婦でハワイに渡り、そこでA+1の父が生まれた(1919年)が、生後8ヶ月で日本に帰った。Aの父親キは次男だった。最初カウアイ島で働き、後に西海岸に移住した。時々日本に帰って来ていた。ボーイスカウトのジャンボリーに参加するために来日したAの父親が周防大島に寄った時、A+1は高校1年生で、おじに初めて会った。その後、A+1が就職して東京で暮らしていた時に、東京でおじに時々会う機会があった。

その他、ハワイに暮らしていた父の兄弟の内、叔母のヨとは親しく交流があった。彼女は男子1人、女子3人の子供がいて、夫は大工だった。A+1が小学校に入った頃、つまり6、7歳の頃に、サロペットのジーンズ、革ジャン、革靴などがハワイか

ら送られてきた。しかし、戦後5、6年しか経っていなかった頃で、離島の周防大島ではまだそれほど普及していないものだった。それ故に従兄弟のA+1は目立つのが嫌だった。また、当時の服はゴワゴワしていて、着心地もよくはなかった。

祖父のセは移民した最初にハワイ島のヒロで働き、後にホノルルに行き、アメリカ本土へ移住した。長男のデつまりA+1の父は、日本に帰ったために周防大島町にある家を継いだ。

また、叔母のヨは見たこともないチョコレートを送ってくれて、嬉しかった。また、コーヒーも送ってきて、渡航歴のある祖母が美味しいと喜んで飲んでいた。

A+1は製菓関係の会社に定年まで勤めた。12年前に退職して実家に戻った。15年前から、みかん畑の世話をするために、妻が先に戻り、本人も東京と行ったり来たりしていた。父は、米作りをしていたが、昭和35、6年あたりから、みかん作りへと移行した。

父親のデは若い頃、東京でメンズの洋服の仕立ての学校に通っていて、家に戻った。しかし、第二次世界大戦のため召集され呉で被曝した。被曝手帳をもらっていたが、後遺症はなかった。終戦後は家で農業をしていたが、後に広島洋の洋服の仕立屋で働いた。その間は、周防大島にいたおじやおばそして妻が家の農業を担っていた。

A+1とAとの交流について記す。Aはよく周防大島に戻って来ていた。名古屋に転勤していた時に、成人してから初めて会った。Aは子供の頃に日本語学校に行っていたが、大人になってからは片言しか話さなかったの、当時はあまり話ができなかった。Aは現役時代には中学校の先生をしていて、最後は校長になった。彼女は家もあるし、ヨットも持っていて、豊かな暮らしをしている。Aの兄弟キは同じく中学校の図工や建築の先生をした。

おばのヨはA+1が名古屋に赴任中に、息子を連れて泊まりに来て、滞在中には皆の食事を作った。もう一人のおばのレはハワイの空港の税関に勤めていたので、日本語を話した。退職後はツアーの添乗員をして、ハワイの人々を日本に連れてきた。

A+1とハワイに在住する親戚との交流は、かつては言葉の壁が大きかった。しかし、最近はメールのやり取りをよくしている。なぜなら翻訳ソフトを容易に使える時代になったので、理解し合えるようになった。

最後にAの父、つまりおじとのエピソードとしては、高校時代にパーカーの万年筆やボールペンをプレゼントしてもらった。もったいなかったの、そう簡単には使えなかった。

以上のインタビューは、A+1の自宅前に建て

られた別宅にて行われた。妻も途中から同席した。

5 まとめ

今回はホノルル山口県人会の日系ハワイ人へのインタビューを計画し、実践している過程で、紹介などもあり、山口に旅行に来た同県人会所属の日系ハワイ人にもインタビューができた。付加的に南加山口県人会に所属している周防大島に暮らす A の従兄弟へのインタビューも実現した。インタビューは先祖が周防大島出身者に加えて岩国や由宇などの出身者だった。

本フィールドスタディの対象は、結果的に70代から80代であった。主に日系三世及び四世の人々である。彼らは現役を終え、ルーツや家系図作りに関心が高く、自らも調査をしていた。その方法はJCCHなどを通じてハワイで調査したり、来日して調査をしたりしていることも理解された。今までインタビューした日系アメリカ人は全て両親が日本人あるいは日系人である。そのために、見た目はほとんど日本人と変わらない。しかし、日本語を普通に話す人はいなかった。

四世、五世そして六世までもが成人し混血が進んでいる今日、日系人という概念がどうなっているのか。今後の興味深い課題である。また、山口をはじめアメリカにある多くの県人会の未来の存亡の危機もないわけではない。しかし、まだまだ日系アメリカ人は元気で活躍をしている。

今後も祖先が周防大島出身者を中心にその周辺地域の日系人を加えて、インタビューを継続するとともに、日系三世や四世の子孫へインタビューにも挑戦したいと考える。こうしたインタビューを通じて、日本とハワイあるいはアメリカ本土の間で、どのような日系人と日本の郷土の人々との交流があったか、そこで起きたギャップによる戸惑いや新しい価値観及びライフスタイルがどのように創出されたかなどを探って行きたいと考える。

移民の人々にとって家族のルーツ探しや家系図を作る欲求は、個人的な要因だけでなく、自分の文化のアイデンティティを確認し、自らを理解したい欲求ともつながっているように思う。世界的に若い世代は、漫画やアニメそしてファッションやゲームなどへの興味から日本語を勉強しようとしているものも多くなっている。日系四世、五世、六世などの人々は、また新たな感覚で日本文化に触れているに違いない。彼らが今後、新しい動機によって自らのルーツへの関心が高まるのではないかと推測する。これらについて、若い世代の日系人にインタビューをしようとする。

本来の筆者の研究フィールドである服飾研究について、今回の訪問時に、ホノルル美術館にてアロハ

シャツの展覧会「Fashioning Aloha」が行われていた。筆者はこの展示内容や得られた文献を参考にし、今までのアロハシャツの歴史とデザインに関する研究を補完して別のところで発表する予定である。今後の継続したインタビューでは、服飾文化についても掘り下げるために、アロハシャツ以外に、ホロク、ムームー、ホロムーなどについても研究対象としたいと考える。

謝辞

今回の研究のためのインタビューを実現するにあたり、柳居俊学山口県議会議員にご指導を頂いた。また、山口県国際交流課の皆様にはホノルル山口県人会との調整をして頂いた。現地インタビューのための人選をした山口県人会ゲール・マサミ・ワカタケ会長、全面的にサポートをしたミズキ・マクレガー及びジョン・オクタニ、そして側面的なサポートをしたハワイ州政府観光局日本支局ミツエ・ヴァーレイ支局長、貴重な時間を割いてインタビューに応じたインタビューの皆様、要旨等英語文に関するネイティブチェックをしたシドニー・マイケル山口県立大学国際交流員など、全ての皆様にこの場をお借りしてお礼を申し上げたい。

2024年6月15日の現地の交流会でゲール会長に山口市からの熱いメッセージを伝えた。今後のホノルル市と山口市との姉妹都市提携に向けてホノルルでの交流が少しでも役立っていたら幸いだ。そしてホノルル訪問の5ヶ月後の11月21日にホノルル市議会とホノルル山口県人会の歓迎会が山口市主催で催された。ハワイで同席したゲール・ワカタケ会長及びローリー・エンドウ理事と近い間にまた親しく交流ができたことについて、関係各位に心から感謝したい。

註

- 1 拙著「山口県と日系移民のフィールドスタディ（1）～南加山口県人会における日系三世を事例として～」『山口県立大学学術情報 第17号(基盤教育紀要 第4号)』山口県立大学、2024年、613-625頁。
- 2 施設・資料について「日本ハワイ移民資料館」<https://suooshima-hawaii-imin.com/about/> 2024年12月21日取得。
- 3 えひめ丸慰霊碑・ハワイ写真館「在ホノルル日本総領事館」https://www.honolulu.us.emb-japan.go.jp/sonota_ehime.htm 2024年7月18日取得。ここにEhimemaru えひめ丸事故のことが記されている。2001年2月10日オアフ島沖で、アメリカ合衆国海軍の原子力潜水艦グリーンビルが、愛媛県立宇和島水産高等

学校の練習船だったえひめ丸に衝突し、えひめ丸を沈没させ、教員・乗組員5人、生徒4人を死亡させた事故。慰霊碑が2002年2月9日にカカアコ臨海公園に建立、除幕された。同慰霊碑からは、事故発生及び沈没海域を臨み、えひめ丸が出港した港に立つアロハ・タワーが見える。慰霊碑は、慰霊碑管理協会や高校生など地元のボランティアによって清掃されている。日本の各県の県人会も分担して清掃活動に参加している。

- 4 Loyalty Questionnaire, 'Densho Encyclopedia', https://encyclopedia.densho.org/Loyalty_questionnaire/ 2024年12月21日取得。

忠誠心アンケートについて：1943年、陸軍省と戦争移転局（WRA）は、WRAの強制収容所にいる日系人の忠誠心を評価する官僚的な手段を作るために手を組んだ。すべての成人は、非公式に“忠誠心調査票”として知られるようになった用紙の質問に答えるよう求められた。このアンケートへの回答は、陸軍省が二世全員を戦闘部隊にリクルートする際の助けとなり、また戦争移転局が収容所外への移転を許可する際の助けとなった。この登録プログラムは、その挑発的な「忠誠心」の質問により、様々な抵抗を引き起こし、一世と二世の間に、戦時中の違憲な扱いに対する恨みを植え付けた。

(中略)

第25問から第28問までは、日本で出生届を出しているかどうか、日本国籍を放棄しているかどうか、命令があればどこでも戦闘任務に就くかどうか、そして最後にアメリカへの忠誠を宣言し、日本の天皇への忠誠を放棄するかどうか問われた。第27と第28の質問は当時最も注目され、将来徴兵手続きが行われる可能性、兵役と引き換えに二世の権利を回復するという言及もなく、陸軍省が「自発的」に二世のための隔離戦闘チームを創設すると発表したこと、そして、西海岸から全ての日本人を排除し、米国生まれの二世市民を含め、法の正当な手続きなしに彼らを投獄するというプロセス全体について、多くの疑問が投げかけられた。

- 5 JCCH HISTORICAL GALLERY 『お陰様で OKAGE SAMA DE I am what I am because of you』 'JAPANESE CULTURAL CENTER OF HAWAII.

- 4 Edited by Laura Ruby, 'Moiliili - The Life of a Community', Moiliili Community Center, 2002, P. 127.

5 筆者撮影（モイリイリ公園内）

6 筆者撮影（JCCH会場内）

7 筆者撮影（JCCH展示会場入口）

8 筆者撮影（JCCH展示会場内）

9 ジョン・カズオ・オクタニ所蔵・写真加工

10 ジョン・カズオ・オクタニ所蔵

写真：撮影者（場所）・所蔵・出典等リスト

1 G 所蔵

2 G 所蔵

3 筆者撮影（モイリイリ JCCH 前）